

(別紙様式 = 中学校用)

都道府県番号	27
都道府県名	大阪府

【 】

*重点をおいた観点にチェックすること

学校名及び規模

学校名	貝塚市立第三中学校					
学 年	1 年	2 年	3 年	養護学級	計	教員数
学級数	4	4	4	4	16	32
生徒数	153	138	153	22	466	

研究の概要

(1) 研究主題

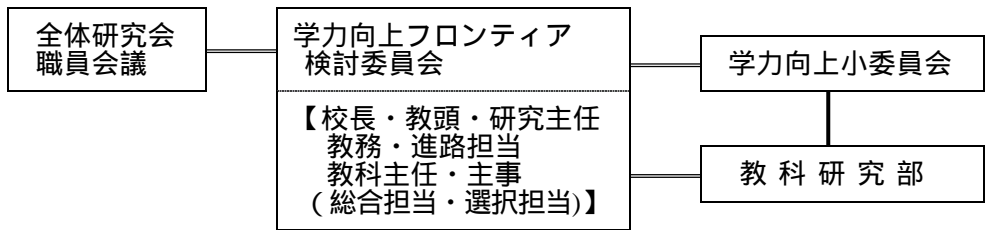
『少数制授業による学習意欲と学力の向上をめざして』
- 個に応じた指導を中核に据えて -

(2) 研究主題設定の趣旨

本校では、この数年来、英語科・数学科による習熟度別少数制授業（チーム・ティーチングを含む）に取り組んできた。しかしながらこれは単学年による取り組みであり、とくに基礎学力の向上に関しては、全学年による取り組みが効果的である。特に数学に関しては小学校からの学力差が大きく、一斉授業では対応しにくい状況があり、この点が数年来の本校の課題でもあった。今回を機に、全学年の必修授業における数学・英語はもとより、選択履修による学習を配置し、個に応じた対応も行うなかで、学習意欲と学力の向上をめざしたい。なお3年間の重点目標は以下の通りである。
平成14年度「習熟度に応じた授業内容の創造」
平成15年度「必修と選択履修の相互補完授業の達成」
平成16年度「個に応じた授業のための戦略の確立」

研究の概要

(1) 研究推進体制の工夫



学力向上のために考えておかなければならない視点や内容、そして、推進していく計画・手順を毎月の「学力向上小委員会」で検討するとともに、少数指導や個に応じた指導、選択教科の在り方等の具体的・実践的な研究を各「教科研究部」で進めながら、それらを「学力向上フロンティア検討委員会」で集約し、全体研究会や職員会議の場で共通理解を図る。

(2) 研究の実際

1. 数学科の取り組み「数学科における習熟度別少数指導の活かし方」

昨年度は、全学年・学級で、1つの学級を「基礎充実コース(約10人)」と「標準コース(約30人)」に2分割して授業展開することを基本とした。コース選択の機会、年度

始めと9月の2回であった。本年度については、試験的に、第1学年では機械的分割でスタートしたり、第2学年では3つの領域ごとにコース選択の機会を設けたりして、よりよい少人数指導の在り方を検証していくことにした。

習熟度別学級編成にあたっては、事前に簡単な復習テストを実施し、生徒のレディネスを明らかにして伝えた上で、本人と保護者の希望を重視しながらコースを決定していく。場合によっては、個人面談を行い、より詳しく両コースの違いを説明して再考を促すこともある。

なお、定期考査を含めた評価・評定については、共通の問題・観点・規準で行っている。習熟度別指導を活かす方途を探る

内容面における差異

) 質的差異

これまでは、学級集団の平均的な生徒に合わせた授業展開が中心であった。しかし、習熟度別に指導することで、生徒の実態・習熟の程度をより意識した異なる学習教材・内容を各コースごとに準備することが可能となった。

授業内容	基礎充実コース	標準コース
負の数の意味及び0の意味	日常生活で負の数が使われている場面を振り返り、「もし、負の数がなければどうなるか」を考える。例えば、ゴルフでは、異なるホールを回っている選手の比較がしづらくなる等。	数の拡張という観点からも押さええていく。また、基礎コースでは扱わなかった「0の意味」についても考えさせた。例えば、「 -3.5 を四捨五入するといくつか」を幾つかの具体的場面を通して考えていく。

) 量的差異

基礎充実コースでは反復練習の場を授業に組み込み、しかも教科書レベルの問題を理解するために必要となる基礎問題・復習問題も適宜扱うようにしている。また、生徒の誤答を素材にして、「どこが間違っているのか」「なぜ、間違っただろうか」「正しい方法は?」「そこで活用している数学的な考え方は何か」等を考え発表させる場面も、標準コースに比して圧倒的に多い。

一方、標準コースでは、基礎充実コースでは踏み込めない範囲まで数学的概念や意味の理解を深めていくことが多い。その分、全般的に反復練習の場は少ないと言えよう。また、時間的余裕があった場合でも、同レベルの問題はあまり扱わず、徐々に難度を上げていくことにしている。

方法面における差異

基礎充実コース：スモールステップ・反復練習や集団討議などを意識しながら問題解決を図り、その後「習熟」させることに力点を置く。
標準コース：できるだけ多くの生徒に新しい発見を自力でさせる。他に頼ることなく、粘り強く考え続ける力の育成に力点を置く。

個に応じた指導

) 個々の実態を見つめる

基礎コースでは、学習目標に迫る上で必要になる自力解決のための「ふるさと」を確認したり、効果的にフィードバックしたりする時間を十分に確保できる。各自が自信を持って取り組める安定した足場(スキャホールディング)から新たな学習をスタートさせていくことができる。

また、様々な機会を通して、小テストやノート点検をして誤答の多い問題を再度解説したり、つまづきの原因を明らかにする簡単な質問を授業に組み込み、それらをファイリングして活用したりすることもあるが、これは生徒一人ひとりの日々の成長・課題をタイムリーに把握して早期対応するのに役立つ。さらに、生徒個々の克服すべき課題を念頭に置いておくのが容易なので、「この発問は誰に答えさせるとよい」という細かな配慮が正確に行えるのである。

) 訂正帳を生かして

本校では全学年・学級の数学授業で「訂正帳」を用意させ、自らの思考過程を振り返らせていく。この訂正帳では、授業で間違っただ自分の解答をもう一度書かせ、誤った箇所を訂正させるとともに、「なぜ、間違っただのか」「どのような考え方が使われているのか」をコメントさせている。提出は1週間に一度させているが、教師は生徒の理解状況を把握したり、ノートに簡単なコメントを付して指導したり、場合によっては直接指導したりする等、広範囲にわたっての利用・活用が考えられる。

2. 英語科の取り組み

「学習意欲を喚起し、学習効率と基礎学力を向上させるQuick Learning」

学力向上には習熟度で少人数に分け、異なる授業方法をとる事に加え、基礎学力を保障し、学習意欲を継続的に喚起させるような全体的な取り組みが必要である。全体と習熟度別での双方の取り組みが相互補完する中で、効果的な学力向上が見られるのではないかと考えている。

そのためにリスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの四技能のそれぞれと、それを統括する脳内言語操作活動の活性化を図る教材と学習方法としてクイック・ラーニングを開発している。つまり「速記」「速音読」「速聴」で「言語操作スピードをアップする」という一見単純な工夫により、脳が活性化し、言語学習に必要なとされる以下のねらいを達成しようとしている。

学習の動機付け(興味関心)の強化と学習意欲の向上 学習における集中力の持続
学習の基礎を成す単語、熟語等の習得 自己評価、相互評価、客観評価等、ふりかえりの効率化 個に対応した学習進度の保障

A:クイック・ライティングの取り組み

1単語×3回を10秒以内を目標として、フラッシュカード等を使っての音声面での練習の後、ノートに筆記させる。秒数をカウントし、結果を記録させる。

B:クイック・リーディングの取り組み

教科書本文については、音読での速読を行っている。ペアワークでストップウォッチを持たせ、教え合っ、測定し合いながら練習させ、最終的に教師がテスト(測定)する。

30words程度の文で10秒未満をA、10から15秒未満をB、15秒以上をCとして評価する。

基礎クラスにおいては、ワークシートで読み方を提示しておく。

C:リスニング・トライアスロンの取り組み

「速聴」を利用した学習に、筆記テストを組み合わせたオリジナルの教材を開発している。新出単語とその例文を録音し、そのMD(カセットテープ)と学習資料(冊子)を全員に配布し家庭学習用としている。その録音方法は、通常速度、2倍速、3倍速、4倍速と音程を変えずにスピードのみを上げる方法で録音している。何度も繰り返し聴く事で言語操作のスピードアップと学習時間の短縮化を図っている。

D:ワーズ・マラソンへ発展させる取り組み

リスニング・トライアスロンで聞き、書いて家庭学習して来た単語や熟語を、授業開始のウォームアップとして毎回テストする。

リスニング(2倍速等)の後、テスト用紙(個人の進度差により異なる)を配布
テスト用紙に従い、1分間で進める所まで単語(熟語)を筆記する。

班でつけをする。

間違いのあった一つ前までが、そのまま得点となり、次回はそこから行う。

(例) 25 forget 26 meeting 27 start ×28 haur 29 ago

30 look for

この日の得点は27点。次回は28番目からスタートする。

(3) 研究の成果と課題

1. 数学科の成果と課題

習熟度別少人数指導の成果

学習者の立場から

授業の終わりに感想などを求めることがあるが、習熟度別指導に対する心理的な抵抗はほとんどなく、むしろ「分からずに辛い思いをしながら過ごす授業」「驚きのない退屈で意欲のわかない授業」と決別し、一人ひとりが自分なりの「達成感・成就感、喜びや感動を味わえる授業」を手に入れたことが大きいようであった。

指導者の立場から

また、指導する立場からは、「習熟度別指導が、自己の課題と向き合い自己実現を目指す教育である」ことを基盤にしながら、(ア)各コースの指導目標・内容・方法を設定・計画するとともに、(イ)生徒各々の実態を捉え、つまずきの原因を素早く掴むことが可能となった。(ア)によって、従来では指導し切れなかった応用・発展的な内容や基礎・基本的な内容に十分な時間を費やせるようになったし、(イ)によって、生徒一人ひとりの次に昇るべき学習段階を意識しながら、その都度、授業を微妙に、あるいは大胆に軌道修正するという配慮ができるようになった。

克服すべき課題

基礎コースの課題は、多様な見方・考え方に触れる機会が少ないという点であり、このことへの対策は今後十分に検討しなければならないだろう。

標準コースにおいては、生徒数が比較的多いため、個に応じたきめ細かい指導が十分為

されているとは言えない状態である。標準コースにおける個に応じた指導をより一層充実させるにはどうすればよいのかも、本校における喫緊の課題である。

将来の展望

- ・コース別の指導計画の整備：各学年・各コースごとに学習内容を選び抜き、最も適した指導方法を検討するとともに、どれだけの授業時数を充てていくかを計画すること。
- ・自己教育を支える「ふるさと集」（公式・定理とその導き方等）を作成すること。
- ・40人一斉授業との質的違い、単なる少人数指導との質的違いを鮮明に打ち出すこと。
- ・必修と選択におけるそれぞれの評価を相互に交流させ合うシステムを構築すること。
- ・表現力・伝達力の育成：数学用語の適切な使用、分かりやすくするための工夫、ポイントの強調、相手が理解できる方法の使用、躰きの箇所とその原因の把握等の重要性を再確認し、授業場面で指導していくこと。

2. 英語科の成果と課題

成果として、ベーシックコースでは、今までは基本的な単語の多くが書けなく、教科書がほとんど読めないような生徒でも意欲的に活動を行うようになった。結果、速音読では、ほとんどの生徒が基準時間以内で読めるようになり、一部基準時間に達していなくても読む能力の大幅な向上が見られている。それにも増して、テストのためのテストに留まらず、自分のタイムを縮めるために何度でもトライする生徒も出て来ている。

またワーズ・マラソンでは休み時間からテストに向けて学習する生徒も多くなってきている。また自分の進度に合わせて、ゆとりと目的意識をもちながら学習するようになった。

今回の取り組みの特徴であるが、基準やルールを「時間」や「番号」に単純化する事で、指導者と生徒とが評価基準を共有化できるようになった。抽象的な評価基準を直接表面に出さずに、それらを内包する規準に統一し、生徒にとってわかりやすくする事で、自己評価、相互評価が非常にやりやすくなった。また良い意味での友人との競い合いもしやすく、共に学力を向上させる機運を作っている。

このような取り組みは、ベーシックでの授業に限る事なく、学年全員で行う事で、学期によってコース変更をした折も、反復学習を継続し、それぞれの個人レベルにおける基礎基本の定着を図る事に役立っていると思われる。

(4) 研究成果の普及の方策

平成15年10月30日(木)に、研究の中間発表会を実施する。

1. 全体会・本校の取り組み概要・数学・英語科の少人数指導発表・指導講評

2. 公開授業

第3学年必修教科 テーマ「効果的な少人数指導の在り方を探る」

- ・数学「基礎コース(関数 $y = ax^2$)」
- ・数学「標準コース(関数 $y = ax^2$)」
- ・英語「グラマーコース(不定詞の応用)」
- ・英語「コミュニケーションコース(不定詞の応用)」

第2学年選択教科 テーマ「必修教科との補完を目指した選択授業」

- ・国語「絵手紙を書こう」
- ・国語「漢字検定に挑戦しよう」
- ・社会「地理に強くなる」
- ・数学「数学の応用問題にチャレンジ」
- ・理科「身近なもので科学しよう」
- ・美術「描写力アップを目指そう」
- ・家庭「ものづくり」
- ・英語「1年の復習に取り組もう」

3. 分科会・公開授業 についての研究協議・教科の基本方針

- ・ねらいと工夫の説明・指導助言者からの助言

また英語科で開発した教材については公開し、効果の検証研究については、協力校を募集する。

平成16年11月19日に、研究の本発表会(公開研究授業)を予定している

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校

【学校規模】 3学級以下 4～6学級
7～9学級 10～12学級
13～15学級 16学級以上

【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
その他

【研究教科】 国語 社会 数学 理科
外国語 音楽 美術 技術・家庭
保健体育 その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無

【特色ある取組事例として紹介したいポイント】

本校は、英語科・数学科における習熟度別少人数授業をこれまで単学年で取り組んできたが、選択教科においても実施を試み、学校全体での取組へと展開している。また、生徒の心理的な抵抗等に配慮しながらも、習熟度別指導を「自己の課題と向き合い自己実現を目指す教育である」として共通理解を図りながら、実践的研究を推進しているところは、特筆すべき取組であると考えている。